

みんなちがってみんないい

その(6) 指導教諭 木村 栄

感覚に何らかの問題を抱えていることを「感覚調整障害」といいます。誰にでも少なからず感覚の違和感はあるものです。例えばちよつとした日差しでもまぶしく感じて、目をしかめてしまう人はいませんか？また、洋服の繊維によっては肌触りに違和感があり、着用できない繊維の種類があったり、家族で見ているテレビの音量が大きく聞こえてうるさく感じたりする人もいるのではないのでしょうか。このように感覚は人によって違いますが、あまりにも周りと感じ方が違うと生活に支障をきたすことがあります。

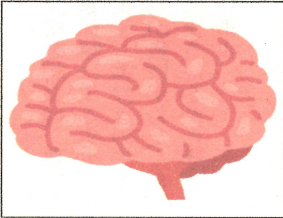
感覚には「過敏」と「鈍麻」があり、それぞれ「感覚過敏」「感覚鈍麻」と呼ばれます。一般的には「感覚過敏」がよく知られていますが、「感覚鈍麻」から引き起こされる問題は、原因が「鈍麻」にあることが見逃されがちです。

「感覚過敏」には「触覚過敏」「聴覚過敏」「味覚過敏」「嗅覚過敏」など感覚器によって様々です。これは「感覚鈍麻」についても同様です。

「過敏」「鈍麻」はそれぞれの「目」や「耳」などの受容器が受け取った情報の受け取り方に違いがあることから引き起こされます。情報を受け取る場所は「脳」なのです。

これら「感覚」の改善にはいくつか方法がありますが、原因になるものを遠ざける方法が一般的です。嫌いな触覚(肌感覚)の洋服は着ないとか、苦手な味は口にしないなどです。

次に、道具を使う方法があります。前述のまぶしさ対策にサングラスを着用したり、臭い対策としてマスクを着用したりすることです。近年、音の問題に対しては広く認知が進み、イヤーマフやノイズキャンセリングヘッドホンを着用す



る人も増えてきました。

もう一つは脳自体を改善する方法です。医学的に脳が成熟を迎える思春期以降では効果が薄いのですが、成長段階にある幼児期～学童期には有効です。これは医療機関等で行われる作業療法を中心とした療育です。トランポリンやスウィングなどの感覚遊具等を使い、直接脳に刺激を与えることで、脳機能の改善を図ります。

成長段階の脳には「可塑性(かそせい)」といって、刺激により機能的・構造的な変化が起こる可能性が高いからです。これにより、抱えていた過敏さや鈍麻さが改善していく可能性があります。

「過敏さ」に比べると「鈍麻さ」が見逃されやすいとお話しました。これは「鈍麻」であることに気付かず暮らしていることが多いからです。例えば、友だちを必要以上に強く叩いて呼び止めたり、ブランコを心配するほど強く漕いだりする子がいます。これは感覚が「鈍麻」なため、強い感覚刺激でなければ脳が満足しないからです。本人は強い力で叩いたと感じていないのに、実際には手形が残るほどの力で叩いていたため喧嘩に発展するなど、感覚の鈍麻さからトラブルになることもあります。

このように感覚の違いは本人にも良く分かりません。生まれてからずっと同じ感覚で生きてきているので、それが困り感であることにさえ気付いていないことがあります。しかし実際には困り感の原因が感覚の過敏さや鈍麻さにあることが少なくありません。

周りが少し見方を変えてあげることで、困り感に気づき、手を差し伸べてあげられることが意外と多いものです。

次回は「発達性協調運動症」についてお話します。



「感覚過敏」という言葉は良く聞きますが、「鈍麻」という感覚があることに、初めて気づかれました。子どもたちが抱えている感覚の問題について、知らないことがまだまだたくさんあります。

そして、「脳自体を改善する方法」のところに書かれている、「医学的に脳が成熟を迎える思春期以降では効果が薄いのですが、成長段階にある幼児期～学童期には有効です。」のところにも、ハッとしました。今東小学校で学んでいる子どもたちは、まさに学童期。正しく刺激を加えることで、脳自体に機能的・構造的な変化が起こる可能性が高いのであれば、困り感をもっている子どもたちが何に困っているのかを正しく把握し、対処していくことが大切だと思えます。そして、それはまさに今、行わなければいけないことなのです。

このコーナーで何度か書いていますが、東小には、「なのはな学級」という特別支援学級と、「すずらん」という「通級指導教室」があります。この「通級指導教室」でも、感覚遊具等を使って、正しく脳に刺激を与える指導をしています。また、一人一人違う困り感を把握し、改善していく授業を、一対一で行っています。

現在の特別支援教育は、医学的な理論に基づいて行われており、子どもたちの困り感の改善に取り組んでいきます。また、安心できる「居場所」としても、子どもたちの心の安定に寄与しています。

子どもさんのことで悩んでいらつしやる方は、一度学校にご相談ください。「みんなちがってみんないい」を執筆している木村指導教諭や、特別支援教育担当教諭が、個別にご相談を承ります。「通級指導教室」の指導の様子を見学することも可能です。

「学童期」の今こそ、子どもたちにできることがあります。一緒に考えていきましょう。